総研大の広報活動―世界戦略としての学生リクルート

荒木　浩

日文研では、一九九二年より、総合研究大学院大学文化科学研究科・国際日本研究専攻として大学院教育を担当しています。同研究科は根っからの大学院大学で、博士後期課程のみで構成され、学部組織及び博士前期課程はありません。三年間で博士号を取得するカリキュラムを構成しています。

したがって、一学年あたり三名程度の大学院生は、すべて他の教育機関を経て入学します。そのため、外部に向けて適切な広報が必要です。この時代ですから、ＷＥＢサイトの活用は当然ですが、そのほかに、ポスターやパンフレットなどを作成して国内外の関連機関に配布して専攻の概要を告知したり、秋には、日文研の一般公開にあわせて大学院説明会を行っています。しかしなにより特徴的な活動は、海外への発信です。

本専攻は「国際日本研究」という名を負い、日文研の理念である、国際的・学際的・総合的という学問の方法を継承・展開する大学院プログラムです。本稿の「世界戦略としての学生リクルート」というサブタイトルは、編集部からいただいた所与のものですが、実際、世界各国から大学院生を受け入れ教育することは、課せられた最大のミッションでもあります。

その枠組みをアトランダムに並べてみましょう。第一に、総研大が提供する広報的事業経費の活用があります。大きく

分けて二つあります。一つは、専攻の教員が大学院の説明会などを行うもの。もう一つは、本専攻の受験を予定する学生が来日して、本専攻の教育・研究などを体験する機会を提供するものです。毎年必ず行う主な事業は前者です。

国際日本研究専攻では、日文研の海外シンポジウム、海外研究交流シンポジウム、日本研究会、また教員個人に関わる企画や機会を利用して、年度ごとに数回の大学院説明会を行っています。平成一九年以降の開催地を思いつくままに列挙しますと、モスクワ国立大学アジア・アフリカ諸国大学、サンクト・ペテルブルク総合大学日本語学科（ロシア）、華東師範大学（中国）、ロシア国立極東大学付属東洋大学、サンパウロ大学、リオ連邦大学（ブラジル）、ジャワハルラル・ネルー大学（インド）、東北師範大学、通化師範大学、黒龍江大学（中国）、タゴール国際大学日本学院（インド）、インドネシア大学、チュラーロンコーン大学（タイ）、復旦大学、南開大学、国立中山大学（中国）、The 3rd JSA-ASEAN International Conference（マレーシア）、ベトナム社会科学院、ベトナム国家大学（ハノイ）人文社会科学大学、ベトナム国家大学（ホーチミン）、人文社会科学大学（ベトナム）、山東工商学院、四川外国語大学、華東師範大学（中国）、ベオグラード大学（セルビア）などとなります。

その結果、本専攻には、アジアの学生を中心に、留学生が多く学んでいます。しかし各国ごとの日本研究の事情に違いもあり、また留学の枠組みにも差異があるため、右に述べた広報活動が「学生リクルート」に直結するものではありません。それは第一の目的ではありますが、それ以外に、こうした活動を通じて、留学生の指導にあたる教員や研究者、また国際交流基金などのロジスティックス機関との連携を深めることや、国際日本研究のプレゼンスを高め、日文研との研究連携により重層的な研究交流が増すことを重視します。

私の参加した例を述べます。二〇一〇年に学会の参加をかねて訪問したタイのチュラーロンコーン大学で、依頼された大学院の講義と連動させ、さらに、本専攻の修了生で、当時チュラ大の講師であった岩井茂樹氏にも協力を仰いで、二人でインタラクティブに大学院の説明を行うことが出来ました。岩井氏は、その後二〇一二年に、大阪大学日本語日本文化教育センター准教授になって帰国しました。チュラ大の後任には、やはり本専攻の修了生である平松隆円氏が、二〇一三年より赴任しています。

このように、本専攻では、学位取得後、海外の大学や研究

機関などに赴任する例も多く、ラプラタ（アルゼンチン）、フィンランド、中国、韓国、タイ、フランスなどで活躍しています。駐日大使館専門員など、高度専門職業人としての活動も報告されています。

そのために、入学後は海外での研究活動の支援・促進にも力点を置いています。たとえば総研大の学生派遣制度を利用して、応募型の海外出張を奨励しています。ここ二年に限っても、テルアビブ大学（イスラエル）、蘭州大学（中国）、フリア美術館（アメリカ）、ウズベキスタン考古学研究所、クイーンズランド大学（オーストラリア）他での研究活動や学会発表などを支援しました。

本専攻でも、プロジェクト研究という応募・申請型の予算を確保しています。その適用の好例として、昨年、東北師範大学で行われた事業の概略をモデルケースとして報告しておきましょう。学生四人（王莞晗、韓玲玲、簡中昊、栄元）が「東アジア比較文学比較文化自主ゼミ・海外学生交流研究会（於中国・東北師範大学歴史系）参加プロジェクト」という企画を立て、東北師範大学ミニシンポジウム「中日大学院生教育における方法と過程：東アジア研究専攻を中心に」というワークショップに参加しました。東北師範大学からも院生三名が発表し、本専攻研究生一名（東北師範大学出身）も自主的に参加しています。シンポジウムの主催者は、元日文研外国人研究員で同大学の韓東育教授です。現地踏査も企画され、元日文研外国人研究員で同大学の王確教授が同行して解説をしました。

日文研という基盤機関で行われる大学院教育として、こうした連携は意義あることだと思います。このほか共同研究会、シンポジウム、レクチャー、国際研究集会など、日文研の研究事業の多くに院生が参加し、発表したり、支援などを行います。院生は、多様な場を活用して国内外の有力研究者と接し、みずからのポテンシャルを高めていることも最後に付記したいと思います。

（総合研究大学院大学国際日本研究専攻専攻長／
国際日本文化研究センター教授）